

全国で字画が最少の町

明治「新」時代の恩「沢」に浴する——という意味から、現在の檀原市西南部一帯に新沢(にいざわ)村が誕生しました。初の市町村制が施行された明治二二年のことです。

この時、同村に合併される東・西常門(じょうど)村と萩ノ本村などを一つにして同村の大字一(かず)が生まれ、この大字が檀原市への編入(昭和三一年)に当たり、全国で字画が最も少い一町(かずちょう)となりました。

町の中央を南北に流れる曾我川東側の扇状地に、弥生時代前期―後期の「新沢一町遺跡」が広がっています。遺跡の発掘調査で堅穴(たてあな)住居多数が見つかり、古くから人の営みがあったと推定されます。

新沢古墳群と境を接する町東部の丘陵に、本尊が古くから「じょうどの大日さん」と親しまれてきた、いまは無住の長法寺跡があります。寺跡に重要美術品指定の四角形柱石灯籠(とうろう)が廃寺本堂前に残っています。廃寺境内の一角へ西常門から移ってきた浄国寺が現在、この長法寺跡に残る堂塔の管理に当たっています。

ちょう
町

かしはら
町名考

かず

一